



Vol. 59

CONTENTS

【コラム】教育改革は大人の責任!?… 渡辺 博芳
【解説】デジタル教科書の過去、現在、そして明日… 原 久太郎

COLUMN



教育改革は大人の責任! ?



2014年12月に中央教育審議会はいわゆる「高大接続答申」をまとめた。本答申を紹介する2015年1月5日付日本経済新聞の記事の中で、安西祐一郎先生は「改革の実現を図ることは大人の責任」と述べている。そこで、1人の大学教員として「大人の責任」を果たすべく何かをしなければという想いから、私自身、反転授業を行ったり、学内でアクティブラーニング導入の活動をしたりしている。

「高大接続答申」では、高等学校と大学の教育を知識の暗記と想起を基本とする受け身の教育から能動的学習へ転換することが特に重要とされている。能動的な学習へ転換するのは、問題解決のための思考力・判断力・表現力などの能力、さらに主体性・多様性・協働性を養うためである。もちろん、知識の修得は当然の前提となる。多くの大学でそのための取り組みが行われているところであり、PBL (Project Based Learning) などの課題解決型科目を大学4年間のカリキュラムを通して継続的に配置すべきであるとか、知識修得のための講義科目においても能動的な学習活動を導入すべきであるといった議論がある。

こうした話は、初等中等教育での情報教育において教科「情報」をきちんと教えるべきであり、ほかの教科教育においてもコンピュータなどの情報手段を活用すべきであるという話に似ていると思う。教科教育での情報手段の活用は、学習効果向上を狙った教育の情報化という側面もあるが、教科「情報」での学びに加えて、学習において日常的に情報手段を活用することで情報活用能力や適切な態度がしっかりと身につく側面もある。一方、思考力・表現力や主体性・協働性も、課題解決型科目で鍛錬するのに加えて、知識修得のための科目においても、日常的にそれらの力を活用することで、しっかりと身につくのではないだろうか。もちろん、講義で行われてきた知識伝達の部分を蔑ろにして、協働的な学習活動にばかり注力したのでは知識修得がおぼつかなくなる。これも、教科教育において情報手段の活用が目的となっては元も子もないのと同じだ。

さらに、能動的学習と情報教育は深く関連していて、情報教育で培われる力は深く対話的で主体的な学習を行う鍵となる。したがって、能動的学習への転換と情報教育の充実は車の両輪であり、若い世代のため、将来の我が国のために重要な仕事である。こうした教育改革を進める上で困難も多いであろうが、「大人の責任」を果たすべく、皆でがんばりましょう。

渡辺博芳 (帝京大学)